

待降節第1主日の説教

金 大烈 神父 2011年11月27日(日)

《三つの質問 ～今関わっている人に最善を尽くす～》

新年おめでとうございます。(注：今日から待降節、新しい典礼暦年がはじまります。)

年末になると『忘年会』が開かれます。「忘れる年の会」と書きますね。しかしカトリック信者ならば、忘年会より『感謝の会』にしましょう。なぜ忘れるのでしょうか。良いことも悪いことも、しっかり覚えておきましょう。忘れようとするのは、新しい年を迎えるのにふさわしくない態度だと思います。一年間、いろいろなことがあったと思います。しかし、『忘年会』より『感謝の会』にしましょう。

『忘年会』という言葉ができたのは、昔々、あまりにも難しい時代を過ごしたためでしょう。「この年を何とか乗り越えられたから、悪いことは全部忘れましょう。悲しいことも全部忘れましょう。」ということで作られた言葉ではないかと思います。しかし、カトリック信者である私たちは、そのような気持より、どんなことがあっても感謝する気持になりましょう。

秋が深くなると、木は葉を落とします。落とされた葉を『落ち葉』と言いますね。木が葉を落とすのは、秋になったからではなくて、生き残るためです。冬の準備をしなければいけない。栄養を自分の体に十分に集めなければならない。それで、葉に栄養分を送る道を全部切るのです。そして葉は力を失い、落ちます。落ちた葉は肥料となり、来年の春を迎えるために自分の命を捧げます。

これは木の生き方の流れですが、待降節にも似たものがあります。待降節の中身は、大きく二つに分けられます。待降節はだいたい4週間あります。そのうち半分は、“捨てる期間”です。そして残りの半分は、“待ち望む期間”です。ただ待ち望むのではなくて、その前に“待ち望むのにふさわしい自分”を作ります。それが捨てるべきものを捨てることです。

今、祭壇の前に飾られているろうそくが4本(濃い紫色、薄い紫色、ピンク色、白色)ありますね。今は、濃い紫色のろうそくが1本だけ点いています。これは、自分の心が濃いことを表します。いろいろなことによって濃くなっているのです。次に薄い紫色、続いてピンク色のろうそくが点き、最後には白色が点きます。これは、心をきれいに清めることを意味します。今は、いろいろなことで心が複雑にうるさくなっています。いろいろな傷、説明できないものに満たされてうるさいのです。これからの2週間、私たちは少しずつ少しずつ、捨てるものは何であるかよく振り返り、一つひとつ惜しまずに捨てる作業をします。それが2週間、皆様と私がする大きい仕事です。その捨てる作業によって、自分でも知らないうちに4週間目になる頃には、きれいに清くなった白い色になる。そういう意味を持っているのがこの4本のろうそくです。ただ、色がついているわけではありません。意味があるのです。この4週間でただ待ち望むのではなくて、捨てる作業でクリスマスを迎える準備をしながら過ごすことができれば、たぶん今まで感じられなかったような本当に喜びあふれる降誕祭を迎えられるのではないかと思います。4週間頑張りましょう。

今日の福音(マルコ 13:33 - 37)に入ってみましょう。

「目を覚ましていなさい。」と書かれています。「目を覚まして生きる」とはどういうことでしょうか。「罪を犯さないで頑張ること」「いつも祈る気持ちで生きること」「誘惑に負けないこと」などいろいろな答えが出て来ると思います。

皆様はロシアの作家であり哲学者である有名なトルストイという人をご存知ですよね。トルストイが書いた「三つの質問」という短編小説があります。その中に、次のような三つの質問があります。

1. あなたにとって、一番大事な瞬間はいつですか。
2. あなたにとって一番大事な人、必要な人は誰ですか。
3. あなたにとって一番大事なことは何ですか。

『一番大事な瞬間』、『一番大事な人』、『一番大事なこと』基本的でものすごく大事な質問かもしれませんが、この三つについて、常に、深く考えて来た人はほとんどいないのではないのでしょうか。

トルストイはこのような答えを出しています。

1の『一番大事な瞬間』は、『今』である。過去は既に去ったもの、未来は確実なものは何もない時間。自分に何かができる時間は今しかない。だから、生きている今こそが一番大事な瞬間である。

2の『一番必要で大事な人』は、『今、私の横にいる人』である。過去の人には去ってしまって、何もできない。未来は誰に会えるのか誰にも分からない。今、私が会っている周りの人々が、私にとって恵みであり、一番必要な人である。

3の『一番大事なこと』は、『一番大事にしているこの隣の人によりことを行うこと』である。私が今出会っているこの人に、最善を尽くさなければ、何の意味があるのか。

よく考えてみれば、そのとおりです。過去と未来は、私たちの力の外側のことです。遠いところにいる人には何もできません。今私が愛している人、憎んでいる人、今関わっている全ての人にできることをしたいと感じること、それが一番上手に生きること、目を覚まして生きることではないのでしょうか。

しかし、トルストイは一つ忘れていることがあります。この三つのことを実践するためには、『力』が必要です。三つのことを悟るためにも『力』が必要です。その力は、神様です。祈りです。祈りながら、今の瞬間に感謝し、何をすべきかを考えるのです。祈りの内に、私のそばにいる人がどのくらい大事な存在であるかが悟れます。祈りの中で、私が今、この人のために何をなすべきかを分かることになります。少なくとも、クリスチャンである私たちは、祈りの中で“今、関わっている全ての人のために、できることをしよう”と感じ、それをしようと努力することが目を覚ましていることになると私は思います。

この4週間の待降節は、捨てる作業になるかもしれません。それは、ある意味では譲ることかもしれません。ある意味では、愛の実践に、また別の意味では、自分の高慢さを殺すことになるかもしれません。それは皆様各自が判断なさり、実践するかどうかの問題です。そのような気持ちで待降節を迎えましょう。

去った一年、いろいろなことがあったかもしれませんが、感謝しながら、やり直す気持ちで新年を迎えましょう。

ありがとうございました。